

図-2 40 m<sup>3</sup>/秒 取水計画による湖水位変動

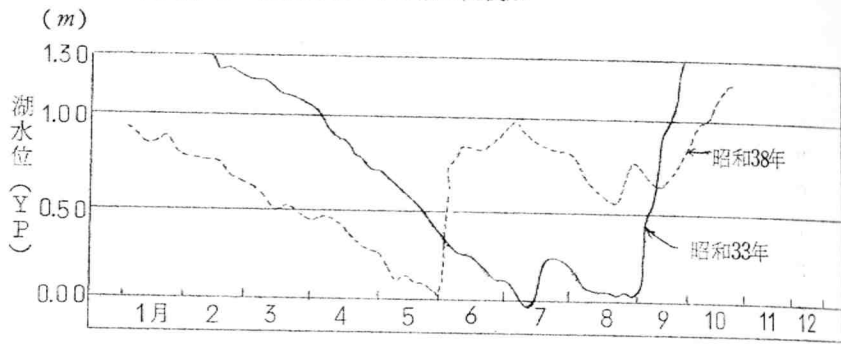


図-1は、昭和33年、昭和38年のような自然の条件の時に、現在計画されている取水(40 m<sup>3</sup>/sec)をすれば、水位がどのように変化するかを推定したものである。

的とした湖水位の変動は、霞ヶ浦の自然を決定的に荒廃させる。ゆるやかな自然現象としての湖水位の変化に対して、そこにすむ生物は、比較的容易に順応してゆくことができる。しかし、人為による急激な水位の上昇と低下は、生物の順応を許さないからである。

湖水位が変動する一・三〇m (Y.P.) からゼロまでの間、即ち表層から水深一m位までの間は、霞ヶ浦という自然の水系にとって非常に重要な場所である(以下、茨城大学、潮来臨湖実験場、菊池氏のお話を参考にした)。

表層から水深五〇cm位までの間(現在はY.P.で一mから五〇cm位の間)には、よし、まこもなどの根のつよい草が生えており、半分は水中に半分は水の上に葉茎を出している。これらは魚にとってかくれ場所、生活の場所であり、水鳥には生息場所を与えると同時に、湖岸を安定化させている。湖水位の急激な低下は、まっさきに、これらの草を全滅させるだろう。

更に表層から水深五〇cmくらいの深さの遠浅の砂地(波打際)と、水深一m位(現在Y.P.でゼロメートル附近)までつづく水草地帯は、多くの魚の産卵場所である。白魚やわかさが砂地で、ふな、こいなどが水草地帯で産卵する。

春から夏にかけて、急激な湖水位の低下があると、この水草地帯と砂地が干上ってしまい、産卵からふ化という最も重要な時期に、魚の生存がおびやかされる。これが三〜四年に一度ずつ起こるのである。

霞ヶ浦の自然の破壊は、目にみえている。現在の毎秒四〇トン取水